



お江戸に学ぶ(下) 豪商の興亡と経営理念

講演:岡本 和久

レポーター:川元 由喜子

江戸時代、豪商たちがどのように栄え、滅んでいったのか、また彼らの教え、江戸時代の企業倫理はどんなものだったのでしょうか。

江戸時代を大まかに四つに分けると、それぞれに違ったタイプの豪商が活躍しています。第一期は、戦国諸侯の御用商人を源流とする門閥的な豪商で、信長・秀吉に仕えた今井宗久、徳川の御用商人として活躍した淀屋常安などが典型です。政権と密接に結び付き、様々な利権を与えられました。中でも淀屋は大坂米相場の独占権を与えられ、巨万の富を築きますが、その財が武家社会に影響を及ぼすようになり、五代目で關所(財産没収)の目に遭います。したたかなのは、四代目の時にそのリスクを察知して、店をのれん分けしておいたために、生き延びることができたことです。幕末には討幕運動に財を投じ、朝廷に献上して淀屋は終わることになります。



鎖国が完成し政治が安定した第二期、国内経済が成長し、「産物廻し」で諸国を行き来する商人たちが現れます。新興の間屋や両替商も登場し、門閥的な特権商人に代わって、地道な新興の商人たちが台頭するようになります。米を基準とする商品経済から、貨幣経済が浸透してくると、諸藩の年貢米を貨幣に換える「蔵屋敷」を任される業者が現れ、鴻池のように大儲けする豪商も出て来ます。寺社建設などで大儲けした紀伊国屋文左衛門と奈良屋茂左衛門は、バカげた遊びで大尽ぶりを競った話が有名ですが、晩年には没落し、同じころ興った住友家や三井家の、良い反面教師となったようです。

第三期には、貨幣に基礎を置いた、新興の両替商や大名貸しが、勢力を拡大します。貨幣経済が発達する一方、地方によって貨幣の取り扱いが非常に煩雑だったため、両替商が活躍し、天王寺屋五兵衛のような大両替商も現れます。その後、諸藩の財政が苦しくなって、「大名貸し」も盛んに行われるようになり、藩の財政や武家の資金が両替商に依存するようになるのです。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

この頃、近江商人のように、全国を回る行商が盛んになります。北海道から九州まで、北前船なども利用し、時には数百人のキャラバンで廻ることもあったようです。会計の帳簿なども充実していきました。加賀からは北前船を操る海運の豪商、銭谷五平が生まれました。また各地で独自の産物を作るようになり、九州各地のように、藩の黙認の下で海外貿易を行うところもありました。

幕末、第四期は、維新の動乱によって登場した新興の豪商たちの時代です。勤王派に忠勤を励んで危機を乗り越えた三井家。動乱に乗じて政治権力と直結した政商、岩崎弥太郎。渋沢栄一や五代友厚なども現れ、「豪商」から「実業家」となって、近代日本の資本主義体制を創り上げていきます。

江戸時代の豪商たちが自ら学んだのは、どうやって企業を永続させていくかということでした。家を継ぐという意味では武家と同じで、武士道と並行するように商人道が出来上がってきます。「おかげさま」の意識、正直・誠実、分相応な生活態度などが説かれ、子々孫々継続するには、家業が世の中の為になっていなければならないと教えます。

そして、代々良い経営者に恵まれるためには、結局、天の支援しかない、それには善行を積むしかない。こうしたことが、多くの家訓に刻まれています。

講演ではこの他、豪商の例として三井家、住友家の経営方針や家訓の話、近江商人の商人道、その例として高島屋と伊藤忠兵衛の話、石田梅岩の思想についてなど、興味深いお話を伺いました。

